

心たのしいスピーチの名手

佐 治 敬 三

大平さんには、私の父・鳥井信次郎がおつきあいをいただいで以来、父子二代あわせて半世紀近くの長きにわたり、ご厚情を賜わってきた。私が初めてお会いしたのは、今から二十数年前、ウイスキーで申せばトリス・バーが全盛の頃であった。当時、大平さんは、大蔵省から政界入りを果たされ、将来を囑望される気鋭の代議士としてスタートされたばかりであった。私の母と郷里が近いこともあり、その親しみ深いお人柄にひかれ、以来、公私にわたって何かとご指導をいただくこととなった。

ところで、大平さんのスピーチについて、巷間「アーウー」のみが取沙汰されていたようだが、これは誤解もはなはだしい。なかなかどうして、わが国の大物と称される人々にしては珍しくユーモアに富み、知性と温かみにあふれる心たのしいスピーチの名手であった。

愚息の結婚披露の席で、当時、大蔵大臣の大平さんからいただいたご祝辞も、印象深いものの一つであった。大平さんは「佐治家のおめでたい席で挨拶するのは、お酒の管轄の役所を預かる者が払うべき税金のようなものと、開口一番、満場を爆笑させられた。ついで、「新しい話を仕入れるために、きのう、本屋に向いて、いろいろと書物をめくってみた」という打明け話から新郎新婦への心あたたまるはなむけの言葉へと移っていかれた。私どもへのほんの短なスピーチのために、ご自身で周到なご準備をなさったとうかがって、その誠実なお人柄に深く感じ入り、また、いたく恐縮した次第である。

印象的なスピーチは、もう一つある。私もは、創業八十周年を迎えた昭和五十四年六月、その謝恩の会を催させていただいた。大平さんは、このとき内閣総理大臣の激務のなか寸暇をさいてホテルオークラの会場へ駆けつけ、ご挨拶をして下さったのである。そのスピーチのなかで、大平さんは、ガルブレイスの著作を読んで感ずるところがあったとして、その所説を引き、「最近の経済は市場の力が弱まり、代って大企業や大労働組合など新しく勃興した新しい力が経済を支配している。これらの新しい力は、もはや自由経済をこわす力としてでなく、ここまで力を持つてくるとそのシステムを支える方向に機能しはじめている。そこに、これからの経済の希望の星が見られないわけではない」という意味のことを読みとったと述べられた。そして、「躍進したサントリーも、もはや政府の手に負えない」とピリリとしたジョークを飛ばして会場を沸かされた後、次のように言葉を結ばれた。「難しい時代がきたが、結局は人間の力だ。佐治サントリー・チームが、八〇年代の展望に立って、企業のためばかりでなくわれわれの祖国のため貢献することを心より期待する」。

まことに簡潔ながら、身が引き締まる感銘深いご挨拶であり、困難な時代に大国となった日本を背負いつつも、決して、人間への信頼を失わぬクリスチャン宰相・大平さんの大きくて温かな心を感じずにはいられない。

それから一年。大平さんは忽然と逝かれた。歴代首相の中では異例の国際感覚あふれるプライムミニスターとして、海外でいつそう評価を高めていた矢先のことであった。殊に、わが国には国際社会に向けて正当かつ明確な自己主張をしていくことがますます強く求められている時代である。大平さんの死は、痛恨の極みと申すほかにない。この上は大平さんの理想が優れた後輩の手に引き継がれ、成就されるよう切に祈るばかりである。私もサントリーも、豊かな生活文化の創造に全力を傾け、「祖国のために貢献せよ」との大平さんのご遺志におこたえしてまいる所存である。心よりご冥福をお祈り申しあげます。

(サントリー社長)